

萬龜

特別号
No.2

檀信凌会館
文由閣



時代に呼応する寺院として

東長寺は平成元年に現在の伽藍を建立しました。

新伽藍を拠点に、檀信徒や一般の方々にとって

親しみやすい仏教活動の場となるよう、

時代に応じた寺院のあり方を模索し、

かたちにして参りました。

これからも、「時代に呼応する」寺院であるために、

日々精進して参ります。



個人へのまなざし

1996年、永代供養付き生前個人墓「縁の会」という新しいお墓と供養のあり方を提唱しました。これは、バブル崩壊後の日本の都市部で、より顕著に現れてきた核家族化の進展や個人化に対しての私たちがなりの応えてでした。

時代は、個人の意志が尊重され、古いしきたりや慣例にとらわれない、その人個人の信条に沿った生き方が実現されるようになってきていました。そこで、「家制度」に縛られず、国籍や過去の宗教なども一切問わずに、一人ひとりが、自身の死生観、人生観にたつて選ぶ、個人のためのお墓のあり方を提案しました。



縁の会納骨堂「羅漢堂」

個人を超えた縁を

2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件が発生。ニューヨークの現場跡地は「グラウンド・ゼロ」と名付けられ、地縁、血縁を超えた犠牲者への鎮魂と追悼のあり方を巡って、さまざまな議論がわき起りました。

私たちは、個人であることは、無縁で寂しい存在ではなく、そこから人とのつながりが限りなく広がるという考えに立ちました。そこで、遺骨を合祀することで、新たな縁が結ばれることを意図して、現伽藍内の一角に合葬墓「多宝塔」を建立致しました。



合葬墓「多宝塔」

人と社会を結び、 新しい文化を創造する

2011年3月11日、未曾有の被害をもたらした東日本大震災と、それに伴う福島第一原子力発電所の事故は、私たちのこれまでの価値観を大きく覆しました。あらためて自然への畏怖の念、そしてエネルギーのありように気づかされた私たちは、今後の東長寺のあり方を再考し、さまざまな新しい計画を立案致しました。

これからの時代に私たちがなすべきことは、人が持つエネルギーを失われた土地や自然環境、文化の再生に活かすことです。檀信徒会館「文由閣」はその拠点となり、先頭に立つ役割を担おうとしています。仏教の本質に照らしながら、次代への支援を行います。

※詳細は次頁をご覧ください。



檀信徒会館「文由閣」

人と社会を結び、新しい文化を創造する

檀信徒会館「文由閣」の成り立ち

東長寺は本年、開創四二〇年を迎えます。明治の廃仏毀釈や東京大空襲による堂宇焼失など、さまざまな困難がありました。檀信徒の皆さまの支えにより、三十五代目を迎えることができました。

平成に入り、さまざまな社会課題を前に宗教者としてのあるべき姿を模索し、時代に対する応えを出せるようつとめて参りました。しかしそれは、東長寺の経営基盤の安定に支えられた活動でありました。縁の会納骨堂「羅漢堂」に続き、「千手堂」もいよいよ本年末に募集数が予定数に達する見込みの中、さらに多くの方のご供養をおつとめするべく建立するのが、今回の檀信徒会館『文由閣』です。「皆さまのご縁を経由し、文化の由縁になる」という強い意志を込めて、名付けられました。

文

「文は文身（入れ墨）の象。人の正面形の胸にV形などの文様を加えたもので、死者を聖化するための方法である。〔新訂字訓より〕

由

「物事が起こった理由、由緒、来歴。そうするための方法、手段。事の趣旨、風情、教養。〔大辞泉より〕

現在、東長寺が課題としているのはエネルギー問題です。エネルギーとは、電気や食糧のみならず人それぞれが持つ生命のことであります。人が紡ぎだすさまざまな行為、それが人に受け継がれ次の時代を生み出すエネルギーとなり、文化が創造されます。エネルギーの交換とは、生命の縁。こうした生命の縁を継承し、伝道する装置として文由閣は存在します。

東日本大震災後、我が国では節電の意識が高まりました。エネルギーをつくるのではなく使わないという姿勢は、海外から賞賛を浴びたものです。こうした日本的な価値観、美意識に支えられたエネルギーとの向き合い方に、東長寺は未来のあるべき姿を感じ取りました。そして文由閣の建築技法をさまざまに検討した結果、採用したのが世界でも最も基準が厳しいとされる「パッシブハウス」です。パッシブハウスとは、建物の断熱性能や遮熱性能を高めるなどして、エネルギー消費量を極限まで抑える省エネルギー技術です。エネルギーを生み出すのではなく、消費しないという理念を建築そのものが体現します。

今回の文由閣の建設は、「二〇〇年後の金閣寺を建立する」というスローガンの下、現代の最先端の智慧を結集させた前例のないプロジェクトです。金閣寺は、当時の最先端の理論と最高峰の技術によって生み出され、いまなお変わらぬ輝きを放っています。文由閣もまた、現代の革新が一〇〇年後のクラシックになる宗教建築を目指しています。

「回向」^{えこう}という活動指針

東日本大震災によって東長寺は、私という個人と寺院の関係だけでなく、社会やそれを支える人の営みに対しても、思いを巡らせる必要性を感じ始めました。

経済成長だけを追い求めて突き進む「直線的な世界観」から、仏教的な「循環的な世界観」へ。私が変わり、環境が変わり、それに呼応して私が変わっていく。大乘仏教という「回向」という考え方で。回向とは、「自ら修めた功德を自らの悟りのために、または他者の利益のために巡らすこと」をいいます。

東長寺は、回向を「功德を回し向けること」と解釈しています。現在を生きる人々のさまざまな活動が、未来に向かい転回する。人の生命は果ても文化は続いていく。つまり、供養とは故人を弔うことに留まらず、未来へと回向され文化を創造していくという考え方です。

昨今、有明海の家産物の不作は、森の植林地による単一化が原因だということがわかってきました。豊かな森が、豊かな海を育む。そのことを知った漁師たちが森に入って針葉樹を伐り、広葉樹を植えているのです。文化を育むには、決して直接的な行為だけではなく、広い視野での関係性を見る必要があります。森が育ち、有明海の家産物が育ち、ひいてはそれを食べる子どもたちが育ち、その子どもたちが新たな文化を生み出す。このように、自分だけではなく他者、そして現世だけではなく未来をも視野に入れて活動を行う。それが、東長寺の根底にある考えです。

東長寺百年之計

今後は、まず経営基盤の安定を確固たるものにするべく、縁の会の募集を継続する決断を致しました。そして「東長寺百年之計」を掲げ、文化支援と地方寺支援を中心とした新たな活動を展開して参ります。

文化支援においては、国内で衰退の一途を辿っている伝統工芸への支援を行います。文由閣に設置する仏具には、石川県輪島の漆塗り、富山県高岡の鋳物、大分県別府の竹細工、佐賀県唐津の和紙などの伝統技術を採用。また「東長寺コレクション」では、海外に流出した日本の文化財を国内に返還し、その文化保存を担っていきます。「東長寺アワード」では、次代の文化を生み出す活動を行っている芸術家、研究者などに賞を与え、活動が発展する仕組みをつくり出します。

地方寺支援では、東長寺におつとめいただいた僧侶の自坊（地方寺院）を核とした「地域づくり」、「森づくり」を推進します。具体的には、樹林葬の精神を継承し故人の遺骨を地方の森へ還すことで、その地域の自然環境の保全、活性化のための仕組みづくりを行います。また曹洞宗と縁の深いシャンティ国際ボランティア会（SVA）を通じ、「震災復興支援」を継続。さらにエネルギーやエコロジー分野について研究を進めている学者や、諸団体への支援を行い、次代のエネルギー問題についての取り組みを応援します。

文化支援、地方寺支援の詳細につきましては、12月号と3月号にて改めてご説明させていただきます。

この時代、そして次の世代に対して、「寺院としてどう在るべきか。そのことを常に問いながら、東長寺は、21世紀の新しい寺院のあり方をご提案致します。

新住職就任に寄せて ― 関口實 「東長寺護持会会長」

平成元年、現東長寺伽藍が竣工したときは、今でも忘れることはできません。当時、瀧澤和尚は三十代半ば、現住職の遙風師が小学校入学の頃でした。和夫大和尚発願のもと、檀家各家をはじめ設計者、工事業者、多くの関係者が一丸となつてこの大事業を成し遂げたことは、ひとえに東長寺の興隆繁栄の礎として位置付けることができません。落慶法要の際には、境内に溢れる檀信徒の誰もが伽藍完成に喜びをあらわにし、これからの東長寺に熱い思いを抱いたものです。あれから四半世紀の間、東長寺はさまざまな形で社会にメッセージを発信し続けています。当時は珍しかった室内墓地や

納骨堂などを整備し、大講堂を拠点とした現代美術の展覧会や、アジア各国の文化を紹介する「アジア祭」、また各種寺子屋教室の開催など、まさに都会の寺としての存在意義をおおいに高める、多岐にわたった活動を展開しました。さらには、平成八年から、今では当たり前となった個人を対象とする永代供養墓（縁の会）という画期的な仕組みを提案し、護持会とともに菩提寺の護持基盤を盤石にしました。

し、和夫大和尚の遺志を次代に繋ぐべく、兼務住職としてお勤め頂いた岡本和幸前住職は、檀家の気持ちを汲んで下さりながら約七年间にわたり東長寺を護つて下さいました。これには、ただただ感謝の言葉しかございません。後進の指導に当たりつつ、新堂建立の基盤をご用意下さいましたこと、重ね重ね御礼申し上げます。

師の父、和夫大和尚の姿を彷彿とさせるものがありました。まさに次世代の住職の誕生といていいでしょう。和夫大和尚のもとの得度式、岡本前住職のもとの法戦式と、折々に参列させて頂き、今、二十六年前の遙風師の姿と重ねて懐かしく思い出されます。

新住職は和夫大和尚、さらに岡本前住職の航跡を引き継ぎつつ、来る時代に合わせた寺院の姿を社会に発信したいという強い決意を持っています。私たちの檀家や縁の会会員も、その意思を尊重しながら支援したいと思っております。どうか皆さん、私たちの菩提寺のさらなる未来を一緒に描こうではありませんか。

宗教の社会貢献の実現に向けて

稲場圭信

「大阪大学大学院准教授」

近年、さまざまな学問分野で利

他性に関する研究が盛んになってきた。利他とは、他者の利益になる行為である。東日本大震災では多くの人が被災地に義援金や物資を送り、救援に駆けつけた。どのようにして人は利他的になるのか。二〇世紀末からの研究は、利他性は社会生活によって学ぶことができるということを示している。その利他性の原動力として宗教の力が強いということもわかってい

る。そして、利他性は、社会貢献という社会的力となる。

宗教の社会貢献には長い歴史がある。身寄りのない貧窮の病人や孤老を収容する救護施設として聖徳太子や光明皇后が設けた悲田院や施薬院が仏教の慈悲をもとにした社会貢献であった。奈良時代の行基の公共事業も有名である。現代社会ではどうか。東

日本大震災の被災地、気仙沼の曹

洞宗寺院、清涼院。緊急避難所となったこの寺院の三浦光雄住職は、前に起きていることを次々とこなすだけという状況だった。経をあげることもだけが供養ではなく、「人と接することがおつとめ」「祈りだけが宗教ではなく、避難者に寄り添うことが本当の宗教だ」と語る。その清涼院の支援を東長寺はしている。

東長寺は平成元年の新伽藍建立以来、さまざまな活動を続けている。文化・芸術支援、環境問題への取り組み等、都市寺院として先進的な試みが続いている。平成八年には、葬送儀礼の変化、社会のニーズに即応し、「縁の会」を発足させた。まさに応病与薬の社会貢献である。

「宗教の社会貢献」とは「宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連

する文化や思想などが、社会のさ

さまざまな領域における問題の解決に寄与したり、人々の生活の質の維持・向上に寄与したりすること」(稲場圭信『利他主義と宗教』)である。宗教の社会貢献の領域は、災害時救援活動、平和運動、環境問題への取り組み、地域での奉仕活動、教育文化振興人材育成、宗教的儀礼救済など多岐にわたるが、宗教側は、陰徳として善行を行い、それを社会に伝えることをよしとしてこなかった。しかし今は、個人にも組織にも説明責任が求められる。寺院も、檀家や社会に対して、何を目指すのかを社会のニーズも把握しながら伝えていく責任がある。東長寺は、そのようなスタンスを重んじているように感じられる。

計画されている檀信徒会館は、一見寺院建築には見えないが、心の安寧を生み出すであろう。そして

寺院は地域防災の拠点にもなる。

一方、地方寺院との協働は距離を超えたつながり、救いである。自他ともに救われる。また、文化支援、人材育成は、効率と短期的な結果を求める論理とは別次元の長期支援、時間を超えたつながりである。「次代をつくる宗教建築と寺院運営を実現する」という東長寺の理念の根幹には、過去、現在、未来の救いがあるのではないか。

東日本大震災という未曾有の大災害を経験した私たち日本社会。「あの時に、大人たちが動かなかったからこんな社会になってしまった」と将来の子どもたちに思われるのか。あるいは、「おかげ様で、支え合う社会になりました」と笑顔の感謝を受け取ることができるのか。

東長寺の社会貢献プロジェクトの成功を願っています。

いなばけいしん

大阪大学大学院准教授(人間科学研究科)。1969年、東京生まれ。東京大学文学部卒、ロンドン大学大学院博士課程修了。2000年、博士号(宗教社会学)取得後、ロンドン大学、フランス社会科学高等研究院等を経て、2003年4月に神戸大学助教授。2010年4月より現職。2007年、オックスフォード大学およびロンドン大学教育大学院客員研究員。研究分野は、宗教の社会貢献、利他主義・市民社会論。主な著作として、『利他主義と宗教』(弘文堂)、『思いやり格差が日本をダメにする』(NHK出版)、『Altruism in New Religious Movements』(大学教育出版)、稲場圭信・黒崎浩行編著『震災復興と宗教』(明石書店)、稲場圭信・櫻井義秀編著『社会貢献する宗教』(世界思想社)、Ruben Habito & Keishin Inaba eds, 『The Practice of Altruism』(Cambridge Scholars Press)。全国の避難所、寺社教会等の宗教施設三〇万件的集約した「未来共生災害救援マップ」(<http://www.respect.osaka-u.ac.jp/map/>)を運営。「宗教者災害支援連絡会」世話人。無料オンラインジャーナル『宗教と社会貢献』編集委員長。

東長寺檀信徒会館 建築設計について「Ⅱ」

前回、東長寺寺報VOL.112において、『東長寺檀信徒会館建築設計について(Ⅰ)』と題し、地中熱を利用した空調設備の特徴を掲載致しました。今回は、大地震の揺れを抑制する免震装置を導入した構造デザインの特徴を説明させて頂きます。

建築の大学教育において、その専門的分野は主に、意匠、構造、材料、設備、歴史の五分野に分けることができます。そして実際の設計段階において重要になる分野は、意匠、構造、設備の三点が挙げられます。意匠とはデザインと言い換えることができ、皆さまが建築物を見た時に見える姿そのものです。設備は前回ご説明したような空調や電気衛生設備などです。そして今回ご説明する構造は、建物を支える重要な要素となり、意匠が建築の花形だとすれば、構造は縁の下の力といえるでしょう。優れた建物には優れた構造が隠されており、特に日本では地震対策も相まって大変重要な分野といえます。

東日本大震災では想定以上の揺れを経験し、さらに津波も襲いかかるなか、コンクリート造りの建物が脆くも破壊され、津波に流されている映像をご覧になったかと思えます。特に旧建築基準法上(昭和五十六年以前)で建設された建物の被害が甚大という報告があり、それに比して新建築基準法上での被害はそれほど大きくはなかったようです。しかし、津波による被害は多く報告されています。これを読み解くと地震による揺れに関しては、それ相応の技術の発展と材料の強度を保持しているものの、津波という予想外の事象、それもメートルを超えた津波ともなれば、それを予見して建物を構築する

ことができなかつたといえます。今後、南海トラフ巨大地震や首都直下地震が三十年以内に七十パーセントの確率で発生するという予想のなか、私たちが考えなければならぬのは、単にその被害を最小限に留めることだけでなく、「生命を守る」ということを念頭にした構造設計だと考えます。

現在の建物における地震動対策は、免震、制震、耐震の三つに大別されます。免震とは、建物と基礎との間に免震装置を設置し地盤と切り離すことで、建物に地震の揺れを直接伝えない構造です。制震とは、躯体に制震装置を組み込み、建物に伝わった地震の揺れを吸収する構造です。地震の揺れが上の階ほど増幅する高層ビルなどに有効な技術です。最後に耐震とは、地震の力に対し、主に壁の強度を上げて耐える構造です。建物が頑丈でも地震の揺れは建物内部に伝わり、二階、三階と上がるほど、揺れが増幅します。大地震が発生した際に室内の状況にどれだけだけの差が生まれるかを考えた場合、そのリスクは一般的に、免震↓制震↓耐震↓何も講じないという順番で高くなっていきます。しかしこれは室内の状況を見た場合という一面からであり、例えば免震は、地盤と切り離すため、津波に押し倒される可能性もあります。今回津波の被害を受けた場所や、今後南海トラフ大地震により津波が到達すると予想される地域に免震構造の建物を建てることはリスクを伴うこととなります。つまり三つに大別された地震動対策は、設置する場所や規模などを入念に検討して導入する必要があります。

現在、東長寺では檀信徒会館の建設が進行中です。すでに杭の

打ち込みが完了し、七月頃には基礎コンクリートの流し込み、そして、九月には地震動対策の「免震装置」を設置することになっていきました。今回の檀信徒会館建設にあたり、入念に構造設計を進めて参りました。その結果、免震装置の導入がこの場所で最も有効な地震動対策となり得るという結論に達しました。構造設計は、アラップというロンドンに本社がある総合エンジニアリング・コンサルティング会社に依頼しました。アラップは世界中で活躍しており、皆さまもよく知っている建築物の構造設計も行っている事務所です。パリのポンピドゥーセンター、シドニーのオペラハウス、日本では関西国際空港などが有名です。構造計算が終了し、国土交通大臣の認定も受けています。次に、簡単に構造の説明をさせていただきます。

構造は、鉄骨造一部鉄筋コンクリート造です。鉄骨は、建物が永く残るよう、高耐久性を持つ材料として用いました。また、通常意匠に隠されている構造体を、古来の寺院と同じように、素材、接合、架構を意匠表現としています。

長さ十一メートルの杭を、本棟部分に六本、エレベーター棟に二本の計八本打ち込んでいます。一階と地下一階の間に、免震装置を設置するフロア（免震ピット）があります。免震装置は、天然ゴム系積層ゴムアイソレータ、弾性すべり支承、鋼製ダンパー、減衰こまを採用しています。前者二つはゴムによって建物自重を支え、地震の際は、建物の重さを支えながら水平方向に大きく変形することで建物を地震から守ります。また鋼製ダンパーは、鋼材の靱性を活かし、大地震により建物に入力したエネルギーを吸収する重要な装置です。減衰こまは主に中小地震、風揺れにより建物へ入力したエネルギーを吸収する役割を果たします。これらの装置によって檀信徒会館の財産の保護、そして建物の安全性を確保し、災害時には帰宅困難者の受け入れも可能とします。

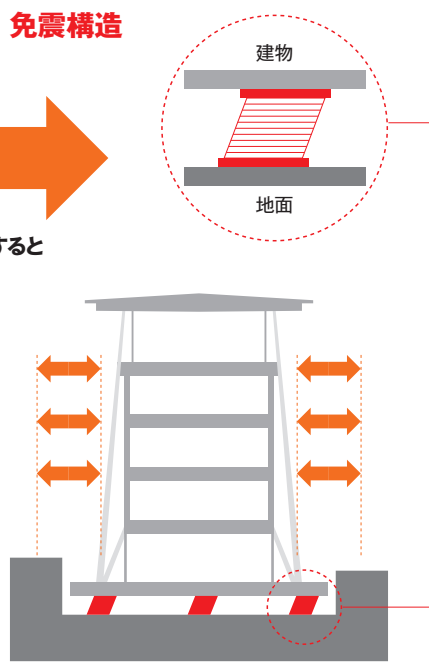
以上、専門用語を多数用い分かりづらい部分もあったかとは思いますが、檀信徒会館の建築設計の特徴として、「免震装置を導入した構造デザイン」をご説明致しました。今回のプロジェクトのスタートは、この構造設計から入ったといっても過言ではありません。完成した暁には、V字に組み上がった鉄骨をご覧になって、その下部にある免震装置を思い描いて頂ければと思います。

従来の構造



建物と地盤が直接接しているため大きな横揺れが起こり、建物の上階にいくほど揺れ幅が大きくなります。

免震構造



建物と地盤が離れているため地震エネルギーを吸収分散し、建物の変形を防ぎ、揺れ幅を軽減します。

檀信徒会館「文由閣」工事の進捗状況

今年一月の着工以来、事故もなく順調に工事が進んでおります。極力エネルギーを消費しない「パッシブ建築」のありようを追求した挑戦的な建設プロジェクトとして、関係者一同、智慧と経験を総動員して、一丸となつて取り組んでおります。完成は、明年四月を予定しております。ご不自由をおかけすることもあるかと思いますが、よろしくお願い申し上げます。

工事スケジュール

四月



地表から地下の帯水層まで掘り、井戸をつくる井水工事の様子

五月



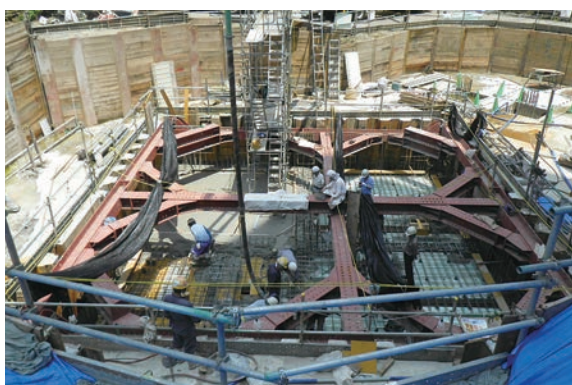
既存杭を撤去する解体工事の様子

六月

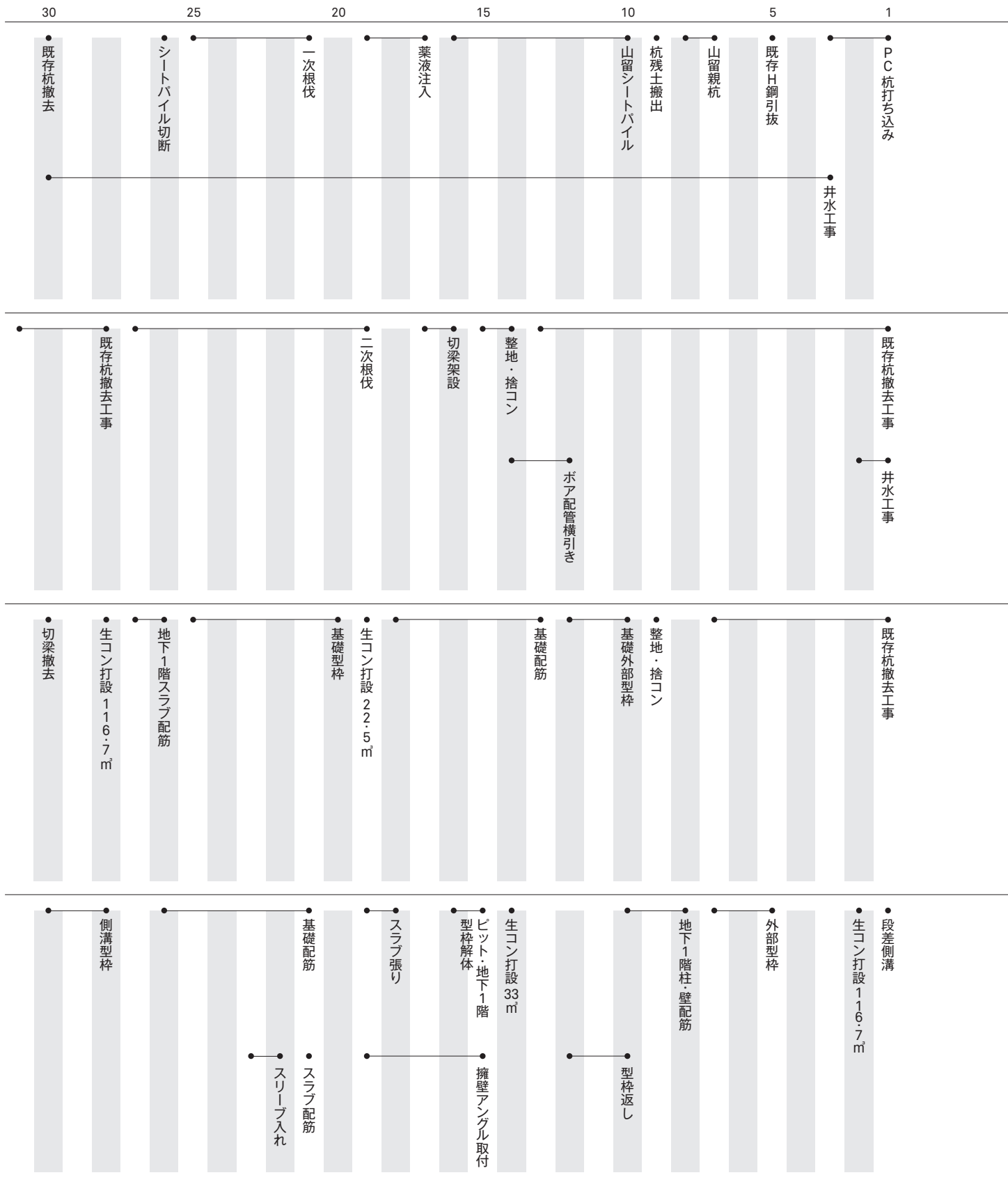


同じく、既存杭を撤去する解体工事の様子

七月



基礎梁から地下一階の床のコンクリート打設の様子



東長寺四百二十年の歴史

東長寺が開創されて四百二十年。どんな道のりを辿って現在に至るのか、その歴史を振り返ります。東長寺寺報VOL.1-3に掲載していた歴史の再録です。

東長寺の開創

東長寺は、萬龜山と号し、文祿三(1594)年、雪庭春積によって開創された。雪庭は埼玉のひとと伝えられているが、その詳細は謎につつまれている。彼は熊谷東竹院三世龍室義門(埼玉の成安寺、白林寺の開山)の跡を継いで第四世になった僧で、天正十(1582)年江戸麴町清水谷に勝興寺を開創したほか、天正十九(1591)年、四谷に福寿院も開創している。東長寺は勝興寺と本未関係を結んだ。

家康が江戸へ入部したのは天正十八(1590)年八月一日である。時を移さず雪庭は江戸(勝興寺)へ移ったのではないだろうか。江戸が関東の首府となる以上、本山の意向があったことも十分に考えることができる。一説によると、家康の帰依を受けた雪庭が、寺領地を賜って勝興寺を開創したといわれるが、これは誤りである。

というのも勝興寺が開創された天正十年当時、

家康は三河(愛知県)遠江、駿河(静岡県)、甲斐(山梨県)、南信濃(長野県)五カ国の領主で、江戸は後北条氏の領国であったからである。

言い伝えによると、西から東に流れる星の夢を見た家康が、この夢の判断を深く帰依していた雪庭に頼んだところ、

東照る西に御星のあらわれて
家康国の宝とぞなる

と答え、徳川家の安泰と繁栄の前兆であると予言したという。

「東照る」はのちの「東照宮」に通じるが、確とした資料もなく、この言い伝えを事実としてとるわけにはいかない。しかし、入部後の家康は各宗の高僧に自ら会い、その言に耳を傾けて国政(宗教統制策も含まれたであろう)に反映させるよう努めたことは事実であり、資料は多く残されている。

家康は自ら市中に出て、工事の状況を視察するかたわら、寺院を訪れて高僧に接している。雪庭と家康の間に何らかの関わりが生じたとすれば、このおりのことであろう。

文政十(1827)年、東長寺から提出された『寺社書上』には「土肥家二代目の当主であった土肥孫兵衛が、天正十八年の家康入部に御供をし、慶長七年に内藤修理亮(清成)の組下にあつて、組屋敷地割等にたずさわった。そのおり、割り余り地が出たのでこれを拝領した。これが東長寺の境内

地である」と書かれている。したがって、当山開基はこの土肥孫兵衛ということになる。東長寺の境内地は「東西百拾六間、南北奥行八拾六間、此坪数貳千貳百七拾七坪」で、かなり広大なものであった。

文祿三年、雪庭はこの境内地に東長寺を開創し、本尊、釈迦牟尼如来、脇立、迦葉尊者(右)、阿難尊者(左)を安置し、萬龜山と号した。

釈迦牟尼如来像は木坐像、像高一尺一寸、両脇立は木立像、像高一尺三寸という。また、東長寺の開創と同時に、境内に二カ所の門前町屋が建立された。

慶長八(1603)年、徳川家康が征夷大將軍となり江戸幕府を樹立した。

曹洞宗門七百有余年のなかで、宗門の諸制度が直接的、間接的に支配統轄されたのは、この江戸期と明治維新直後に起こった廃仏毀釈など二つの時代であったといえる。特に徳川幕府二百六十余年間の政治支配は、その専制封建社会の建設と相まって、宗教政策にも同様のことを行った。

各宗各派に下された諸法度や掟等、また本末関係や寺檀制度に、注目すべき幕府の宗教政策を見ることができる。

徳川政権下における寺院法度制度は、慶長十三(1608)年の頃に始まり、元和元(1615)年には大体完成している。このときから全国の各寺院は、寺社奉行所の管轄支配下に置かれること



出典：古地図史料出版株式会社 | 元禄9年頃の江戸地図

になったわけである。

幕府は各宗の法度を制定し、その条目の中に本寺が末寺を支配する旨を盛り込んだ。言い換えれば本寺の住職が末寺の住職の任命権をもって統轄する政策をとったのである。この関係が本末制度の始まりで、本山の上に幕府がいるわけである。

法度の制定によって諸宗派の教団を一つに統制し、幕府を頂点とする中央集権的な絶対支配体制を確立するための宗教統制策であったといえよう。曹洞宗成立の歴史である。

「永平寺は主として法統の本山であり、総持寺は寺統の本山である」という両寺間の歴史的性格を無視する幕府の一方的な政策によって、たびたび両寺間の対立紛争も起こった。

こういった背景のもとで、東長寺の江戸史が記されていくのである。

元和二（1616）年、家康が病に倒れると、二代将軍秀忠は、全国の寺院に「病平癒の祈祷」を命じた。

東長寺へも本寺を通じてこの命が伝えられ、祈

禱が行われたと思われる。

この頃の江戸は、政治の中心地として急速に発展していた。諸国から江戸へ上る人々は後を絶たず、これにともなう数多くの寺院が建立された。屋敷内の持仏堂、位牌堂を〇〇寺と称する者も多く、元和八（1622）年、幕府によって「新寺建立」に「私に寺院号を称すること」が禁じられた。

寛永四（1627）年九月三日、東長寺において開山雪庭が示寂した。寿八十三と伝えられている。『新撰東京名所図会』の東長寺の項に、「――

開山は雪庭春積大和尚にて、その墓は南丘に存せり」と記されていることから、雪庭は東長寺で示寂したことがわかる(勝興寺、福寿院の項には記載がない。ただし雪庭の東長寺への移住が、東長寺開創と同時にあったかどうかは判然としない。東長寺が雪庭の隠居寺であったとする説は、雪庭が東長寺で示寂したことから起つたものであろう)。

この年の四月二十九日、旗下の土鈴木正次(七右衛門)が没して東長寺に葬られ、以後代々の葬地となった。

正次は穂積氏の流れを汲み、先祖は今川家に仕えていたが、祖父の代から徳川家に仕えていたという。正次の父六左衛門は、本多正信父子に属したいわゆる「上総七十騎」の一騎で正次もまた大番に列していた。大番とは、幕府樹立以後は江戸市中の警備にあたったが、事あれば戦陣に臨む戦鬪部隊の将校といった役所である。正次の長男重次はのちに三代將軍家光から加増されて四百石となり、相模鎌倉、下総香取、上野緑埜(みとの)の三郡のうち知行地を賜っている。また、幕府が諸宗僧侶に位階を制定したのもこの年である。

寛永十二(1635)年六月、『武家諸法度』の改正により参勤交代制度が確立された。

大名は妻子を江戸に置き、在府、在国一年交代が原則で、江戸屋敷(上・中・下屋敷)を設けることとなり、それぞれに江戸詰の藩士を置くことになった。

江戸に移り住んだ諸藩士は、江戸における菩提寺をさだめる必要に迫られたのはいうまでもない。

この当時の寺院は、菩提寺であると同時に学問所でもあり、任職は学問の「師」としての任務もあ

わせてもついていたのである。とくに曹洞、臨済、黄檗といった禅宗寺院にはこの性格が強く、この風潮は現代にいたっても続いている。

東長寺はこれら諸藩士の菩提寺として、また学問寺としての性格を次第に強めていった。当時の武士たちにとって、禅僧について参禅することは教養の基盤でもあったのである。

蛇足ではあるが、当時の武士階級をはじめ、ずれの階層の人々にとっても、菩提寺と参禅(学問)する寺院が、必ずしも同一であるとは限らなかった。

寛永十六(1639)年四月二十六日、土肥家中興二代であり、東長寺の開基にあたる土肥孫兵衛が没し葬られた。『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』に記載洩れをし、また『寺社書上』にも世寿が記されていないことから享年は不明だが、三代・五左衛門、四代・五右衛門(孫兵衛の孫)が没したのこのことであり、相当な年令であったと推察される。

寛永十七(1640)年、幕府は切支丹(キリスト教)を禁圧し「宗門改帳」を作った。いわゆる「寺請制度」の確立である。

士農工商いづれの階層の人々も所属寺院を定め、婚姻旅行・住居移転奉公などは、村役人発行の追手形とともに寺院発行の宗旨手形を必要とした。寺院が一種の戸籍事務を取扱う機関となったのである。

「諸宗法度」や「本末制度」で寺院に対し厳しい統制を加えていた幕府の宗教政策は、このことから末端にまで浸透し、寺院は幕府の庶民支配に重要な役割を果たすことになったが、この寺請制度の確立が、近世仏教の庶民への布教に大きく貢献した

ことも事実である。

東長寺の二千二百七十七坪の境内地に「間口六間半、奥行七間」の本堂が建立され、寺容が整えられたのはこの頃のことであろう。

そしてこの寛永年間(1624~44)に東長寺が中興されたのである。

振袖火事と定火消与力

明暦三(1657)年、俗に「振袖火事」とよばれる大火によって、江戸市街地の約2/3が焼失した。この大火以後、東長寺周辺地域にも次第に町人たちが移り住むようになっていった。

東長寺の『寺社書上』によると、開基・土肥孫兵衛の子孫・土肥三郎助が舟越左門組下の「定火消与力」(定火消御役与力)であると記しているが、『寛政重修諸家譜』によると、船越氏(五千五百七十石)が定火消となるのは貞享元(1684)年のことで、このおりに土肥氏が定火消与力として組下与力となり、以来幕末まで定火消与力として幕府に仕えた。

「定火消御役」とは、明暦の大火の大惨事にかんがみ、明暦四(1658)年に従来のだ名火消のほかに、新たに千石以上の寄合旗本の率いる火消を設けたことに始まる。

定火消は平常は消火を任務とするが、いったん緩急の時は戦線に立つことになっていた。戦闘員と考えてよい。

家康の江戸入部に従った開基・土肥孫兵衛以来、土肥家代々はいわば戦鬪将校であったことになる。

元禄の世と東長寺再中興

元禄元(1688)年四月、幕府は寺院を古跡、新地に分けた。すなわち寛永八(1631)年以前に建立された寺院を古跡として、以降に建立された寺院を新地としたのである。

古跡寺院は火災によって焼失しても再建は認められ、新地寺院の再建は認めないというもので、東長寺は古跡地寺院に含まれる。

元禄十二(1699)年、佐合益菴が五代将軍・綱吉に召出され奥医師となった。この益菴が東長寺の中興開基にあたるかと推察される。

幕府に抱えられた医師は、奥医師、御番医、寄合医師、御目見医師と格付けされ、法眼は奥医師の上席で御番料は廩米二百俵(二百石相当)だが、寛永年中(1624~44)以来、奥医師の薬札は「千両までなら受納してもよい」という不文律があったほど実収入は多かった。

この佐合益菴の名は宗諱とあるが、法名も宗諱であり、以来宗恒、宗渾、宗甫、宗孫と代々が、いずれも名と法名が合致している。このことは佐合氏代々の当主が、生前に菩提寺(東長寺)の住職に深く帰依し法名を授けられていたことになる。

東長寺の梵鐘が鑄造されるのは元禄十三(1700)年八月のこと、佐合益菴の出仕と合致している。

鐘銘によると、この当時の土肥家の当主は豊知といい、その妻法如月院楓屋貞紅大姉の霊を弔ったことが「崑崙亡婦幽冥之福也」の一節からわかる。

東長寺の鐘樓堂「九尺四方」もこのおりに建立された。

また元禄年中(1688~1704)つまり五代将軍・綱吉の時代は『生類憐みの令』などによつて庶民の非難が高まった時代でもあるが、学問好きの綱吉によつて、武士階級をはじめ庶民の間に「学ぶ」という姿勢が浸透した時代でもある。

旗下の士や諸藩士の子弟をはじめ多くの人々が東長寺を訪れて参禅し、学問に励んだと推察される。

寺院の梵鐘の多くは、寺運が隆昌したおりに鑄造される。この例からすると東長寺は、この元禄年中に再中興(重興)されたともよいだろう。

またこの元禄年中は、庶民の間に物見遊山をかねた神社詣でが盛んになっていった時代でもある。東長寺に安置される諸尊像や、護法稲荷社に参詣する善男善女があとを絶たなかったといわれるのも、この頃以降のことであろう。

門前町屋が町方支配(町奉行所支配)になったのも、この元禄年中と伝えられている。

東長寺の本末関係と法流

宝永五(1708)年、各宗本山が「本末牒」を提出した。東長寺の本山は総持寺であり、『曹洞宗寺院本末牒』によると、

「能登国鳳気至郡櫛比諸嶽山総持寺・妙高庵(山内五か院の一つ、通幻開山)——相模足柄郡閨本村・最乗寺(了庵派)——美濃国武儀郡下有知村・龍泰寺(華叟派)——下野国都賀郡富田郷・大中寺(快庵派)——下総国結城郡結城立町・孝顕寺(快庵派)——武蔵国大里郡久下村・東竹院(快庵派)——武蔵国江戸四谷・勝興寺(快庵派)——武蔵国豊嶋郡四谷久能町・東長寺(快庵派)」と記されている。

これにしたがって法流をさかのぼると、東長寺開山の雪庭春積は勝興寺開山で東竹院第四世。東竹院開山の翁文仲は孝顕寺第四世。孝顕寺開山・独峰磨聚の師にあたる培芝正悦が大中寺第二世。大中寺開山は快庵妙慶。快庵妙慶の師が華叟正尊。華叟正尊の師が無極慧徹。その師・了庵慧明の師が妙高庵開山の通幻寂霊……これを辿ると瑩山禅師に達する。

享保の大飢饉とうち続く凶作

享保元(1716)年、紀州の徳川吉宗が第八代の将軍位を継ぎ幕政の大改革を行った。庶民を震撼させた「享保の大改革」がそれである。庶民、特に農民への圧迫が激しくなり、各地で百姓一揆が続発した。

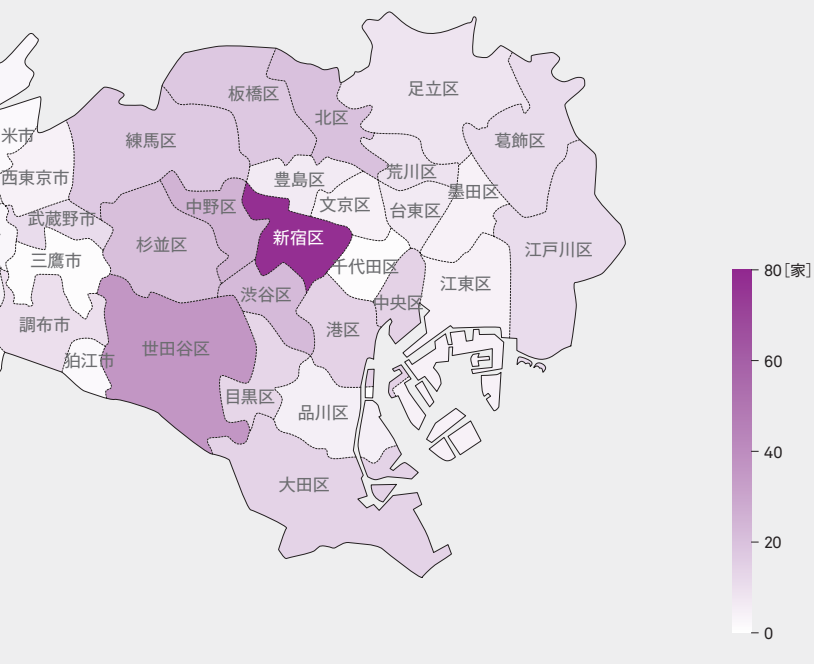
享保九(1724)年九月、幕府は三尺以上の仏像の造立を制限した。これらの背景に「享保の大飢饉」があり、諸寺院を締めつけることによつて、元禄年中以来庶民の間に蔓延していた「派手好み」の風潮を止めようという幕府の意向があったともいわれている。

天明七(1787)年、元(1781)年以後のうちに続く凶作により、諸国に大飢饉が起こった。諸寺院が幕府の救済活動に先立って、それぞれの周辺地域住民の救済活動を行った。当然、東長寺もこの救済活動を行っているはずである。

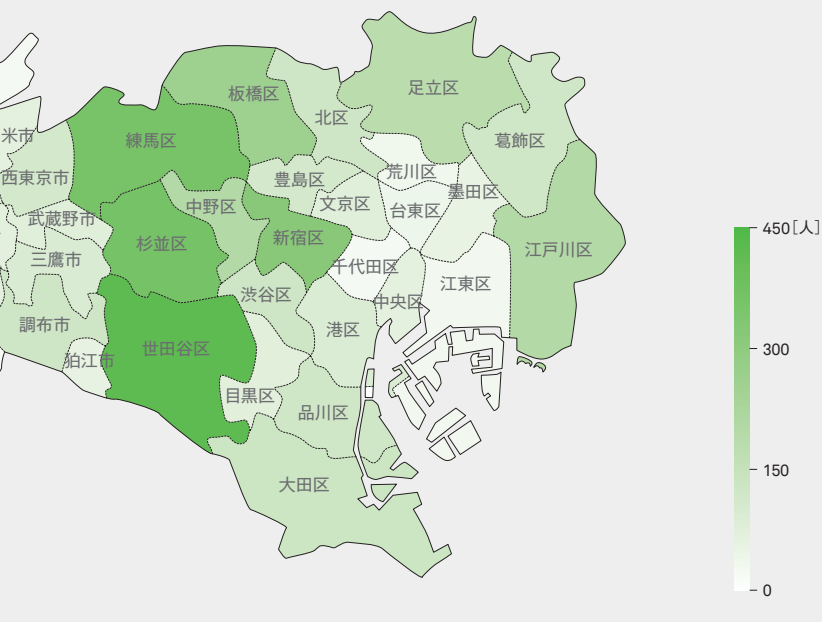
〔次号に続く〕

檀家・縁の会会員の居住地マップ

東京都の檀家の皆さま



東京都の縁の会の皆さま



区	家数
足立区	8
荒川区	9
板橋区	18
江戸川区	11
大田区	14
葛飾区	11
北区	20
江東区	4
品川区	5
渋谷区	23
新宿区	77
杉並区	21
墨田区	4
世田谷区	36
台東区	7
中央区	14
千代田区	5
豊島区	7
中野区	25
練馬区	17
文京区	4
港区	14
目黒区	13
昭島市	0
あきる野市	1
稲城市	1
青梅市	0
清瀬市	3
国立市	1
小金井市	3
国分寺市	5
小平市	4
狛江市	2
立川市	4
多摩市	2
調布市	10
西東京市	4
八王子市	6
羽村市	1
東久留米市	2
東村山市	1
東大和市	1
日野市	4
府中市	5
福生市	0
町田市	9
三鷹市	8
武蔵野市	11
武蔵村山市	1
奥多摩町	0
日の出町	0
瑞穂町	0
檜原村	0
大島町	0
利島村	0
新島村	0
神津島村	0
三宅村	0
御蔵島村	0
八丈町	0
青ヶ島村	0
小笠原村	0

次号以降、東京都以外のデータをご紹介します。



5,439 (総数)



平成二十六年六月末日のデータ

東長寺新縁の会のご案内（東長寺が提案する樹林葬のかたち）

平成八年、当山では永代供養付き生前個人墓「縁の会」を発足させ、これまで二二、〇〇〇名余りの方々と永代供養のお約束を交わして参りました。第一期目は、講堂を改装した「羅漢堂」への納骨のお約束。第二期目は、坐禅堂を改装した「千手堂」へ遺骨の一部を納骨し、残りの遺骨を合葬するというお約束でした。この「千手堂」での募集数がもうじき予定数に達する見込みとなることから、第三期目としまして、現在建設中の檀信徒会館「文由閣」内に納骨堂を新たに整備し、募集を継続することに致しました。そこで、第三期目の縁の会の仕組みについてお知らせ致します。

なお、羅漢堂(第一期)及び千手堂(第二期)への納骨のお約束をさせて頂いております会員さまには、これまでのお約束が継続されるので、新たなお手続き、あるいは費用が発生することはございませんので、何卒ご安心下さいますようお願い申し上げます。

東長寺新縁の会ご契約内容に含まれるもの(仮)

これまで通り、お約束の単位はお一人(個人墓)となります。複数でお申し込みの場合は、人数分の手続きが必要です。

- ①戒名 入会されたすべの方に、曹洞宗の戒名をお授け致します(信士、信女に統一)。
- ②位牌 入会されたすべの方に、戒名を刻銘した位牌を文由閣内の位牌壇にご安置致します(亡くなられてから三十三回忌まで)。
- ③銘板 入会されたすべの方に、文由閣一階の水盤壁面に、俗名を刻銘した銘板を設置致します。
- ④納骨 遺骨の一部を文由閣内の納骨壇に三十三回忌までご安置、残りの遺骨は左記協力寺院の樹林葬墓苑に埋葬致します。
 - ・千葉県袖ヶ浦市 真光寺(岡本和幸住職) 二、〇〇〇名分
 - ・宮城県気仙沼市 清涼院(三浦光雄住職、三浦賢道副住職) 二、〇〇〇名分(予定)
 - ・佐賀県佐賀市 清流寺(光吉清成住職、光吉和美副住職) 二、〇〇〇名分(予定)

※残りの遺骨を東長寺内多宝塔へ合葬するという従来の方法もございます。

⑤ 永代供養

没後、すべての会員を永代にわたりご供養致します。

・三十三回忌まで、亡くなられた月の一日の萬燈供養にてご供養

・三十三回忌以降、引き続きご先祖として供養

⑥ 文化支援

入会金の一部を、「東長寺文化支援基金」として、広く国内外の文化活動への支援金として使用致します。

⑦ 地方寺支援

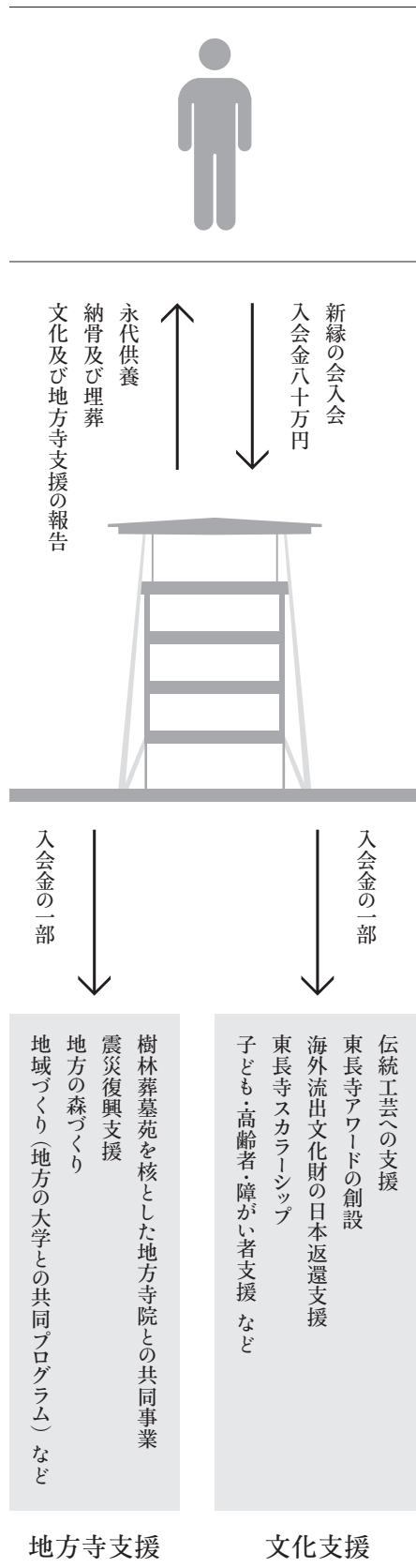
入会金の一部を、「東長寺地方寺支援基金」として、

樹林葬墓苑を開苑する寺院を中心とした地方に、支援金として使用致します。

⑧ 入会金

八十万円(お一人さま)

東長寺新縁の会の仕組み



※ 正式なお申し込みは、文由閣納骨堂の「納骨堂経営許可」が下りてからとなります。予定は、明年五月頃の予定です。

※ ただし、明年一月より東長寺檀信徒のご紹介に限りまして、お受付致します(納骨堂の経営許可が下りるまでにご納骨はできません)。

※ ご不明な点がございましたら、寺務長(手島)までお問い合わせ下さい。

※ 縁の会員で詳しい内容等をお知りになりたい方は、来月より月一回、説明会を実施致します。

日程などは同封の別紙「説明会のご案内」をご確認いただき、お申し込み下さい。お檀家さまへの説明会は、明年一月より実施する予定となっております。



曹洞宗 萬亀山 東長寺
160-0004 東京都新宿区四谷4-34
(檀 家) 03-3341-9746
(縁の会) 03-3353-6874